

久保 榮全集

7

久保

第7卷 評論

編集 宇野重吉 ■ 久野収
武谷三男 ■ 野間宏
羽仁五郎 ■
解説 栗原幸夫 ■ 村上一郎
解題 内山 鵠

三一書房

一九六二年三月二十日 第一版発行

久保 栄全集 第七卷 定価一、四〇〇円

◎ 久保 マ サ

一九六二年

検印
廃止

発行者 田 畑 弘

発行所

株式会社 三一 書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 東京 〇九五八一―五番
振替 東京 八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社
製本所 橋本製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

久保栄全集
第七卷

目次 第七卷

小山内薫

父		二
母		六
扇升		三
謝豹		六
撫子		五
「月について」		四
「病院」		四
人形以上		七
手帳		六
直覚		五
余計者		六
実験室		九
「魂」		三
協力者		三
劇団部主事		一

一九四五年

趣意書(附・添え書) 一八五

マックアーサー司令部宛報告書草案 一八六

草稿 一九四

新日本文学会へのメッセージ・草稿 一九六

一九四六年

ゼスチュア課題 一九九

東芸をつくるまで 二〇一

劇を見る眼 二〇五

新らしい劇場への期待 二〇六

「小山内薫」あとがき 二〇七

一九四七年

「林檎園日記」あとがき 二〇九

「林檎園日記」を書くまで 二一一

戦中日記抄 二一九

「築地演劇論」あとがき 二四三

「ファウスト」訳者から……………二四四

一九四八年

「火山灰地」について……………二四七

小山内薫先生の二十周年に寄せて……………二五〇

「世界の戯曲から」あとがき……………二五三

戯曲におけるリアリズム……………二五八

新劇の二度の危機……………二六七

一九四九年

選集Ⅲ「火山灰地」あとがき……………二六九

選集Ⅰ「中国湖南省」あとがき……………二七三

選集Ⅴ「リアリズムへの道」あとがき……………二七六

選集Ⅱ「五稜郭血書」あとがき……………二八四

一九五〇年

晩学……………二九六

一九五一年

新劇「夕鶴」は、民族的か、民族主義的か？……………二九三

選集Ⅵ「古典と現代劇」あとがき……………二九五

選集Ⅶ「古典と現代劇」あとがき・草稿……………三〇〇

新潮文庫「火山灰地」あとがき……………三〇一

一九五二年

「のぼり窯」あとがき 三〇五

選集Ⅳ「林檎園日記」あとがき 三〇八

青年との対話 そのⅠ 三三三

選集Ⅶ「新劇史のために」あとがき 三六六

「中国湖南省」演出覚え書 三三三

青年との対話 そのⅡ 三三三

私の近況 三六八

「五稜郭血書」の再演にあたって 三九〇

一九五三年

「五稜郭血書」走り書 三三三

角川文庫「吉野の盗賊・こわれた瓶」あとがき 三三九

レアリズムひとすじ 三四〇

「日本の気象」についての対話 三四二

サッポロの秋色 三四七

「モスクワ芸術座五十年史」すいせん文 三四八

私の愛誦する去来の俳句と鑑賞（アンケート） 三四九

舞台の紋切型 三五〇

一九五四年

岩波文庫「織工」あとがき 三七

一九五五年

十代 三三

ある返信 三四

前進座の思い出 三五

民芸の稽古場へ 三六

新潮文庫「新劇の書」あとがき 三六

ポート部と寶生活 三六

民芸ひいては新劇をよくするために I 三六

シラー死んで百五十年 四〇

小山内薫素描 四〇

トの字、スの字 四〇

一九五六年

「新大衆劇」を書く意図 四〇

角川文庫「林檎園日記」巻末に 四〇

羽仁五郎を推す 四二

「音楽の探求」(吉田隆子著)あとがき 四三

青春の糧(アンケート) 四四

曹禺氏とのひととき 四五

近況		四八
太宰治（アンケート）		四九
魯迅の二句		四〇
石狩の思い出		四三
白鳥と砂鉄		四四
堀辰雄（アンケート）		四九
一九五七年		
歌舞伎の謎		四三
再録する小形式脚本について		四四
解題（内山 鵜）		四九
解説（栗原幸夫・村上一郎）		四五

小山内薫

父

明治十四年七月二十六日、広島市大手町二丁目で生れた。父は陸軍の軍医で、津輕藩士である。森鷗外先生の「浜江抽斎」の中に書かれている「小山内玄洋」というのがそれだ。名を健たけしと言った。

—— 小山内薫「自伝」——

戦争は既に所々に起って、飛脚が日ごとに情報を齎した。—— 浅越玄隆は南部方面に派遣された。此時浅越の下に附属せられたのが、新に町医者から五人扶持の小普請医者に抱えられた蘭法医お小山内玄洋である。—— 後建けんと称して、明治十八年二月十四日に中佐相当陸軍一等軍医正を以て広島に終った。今の文学士小山内薫さんと画家岡田三郎助さんの妻八千代さんとは建の遺子である。

—— 森鷗外「浜江抽斎」——

父の母は継母だったらしい、

「お父っさんは子供の時、夜、勉強から帰って来ると、門の所の柳の木の蔭から、おっ母さんがお化けの姿をして出て来ておどかして、家へ入れないようにするのが恐ろしくて、とうとう東京へ出奔して独りで苦学をしたのだそうだ」と母は話していたが、前の鷗外先生の「浜江抽斎」の

件で見ると、明治元年は父の十九の時に当るから、その前の事か或はその当時の事か私には分らない。

——岡田八千代「若き日の小山内薫」——

自分の先祖は、アイヌに違いない、苗字にナイがつくからと、小山内薫は笑いながらよくそう言った。その父が津軽の出であることと、その姓が北海道の地名に似ていることとにかけた冗談である。

事実、石狩川の中流右岸には、納内オサナイという村と駅とがあつて、この名がアイヌ語のオサ・ナイから来ている。オサは砂を、ナイは沢（谷川）を意味するから、オサ・ナイとは、山間の砂の多い水涸れ川のこと、やがてそれがこの形容にあてはまる或る水流の固有名詞ともなり、また流域の地名ともなつて、語彙の少ないアイヌ族の棲息地のそここに同じ名をとどめているのである。

海峡を隔てた津軽にも、この同じオサ・ナイから出た川の名、所の名があつて、もとそのあたりの原住民を統治した豪族が、地名をそのまま採とつて姓としたものだそうである。その夷民統治の歴史が古いことは、オサ・ナイという原語を二様の文字にあてて、小山内とも長内とも書き、この二つの姓が今も弘前に多いことから窺える。こうして足利のころ、南部目代の配下において、小山内氏は津軽の名だたる豪族の一つに数えられ、元龜天正年間に、津軽藩祖大浦為信が、夜討をかけて陸奥西半の城々をくだした時にも、いち早く屠ころつたのが、和徳城に拠る小山内氏で、やがて藩体制の整う過程に、残る一族は家臣の列に編入され、その一部は祖先にふさわしく海岸のアイヌ部落帯の守備にも任じ、その後次第に城下士として弘前に集り住んだものと思われる。

小山内薫の家系も、いずれはこのなかの一つの分枝であろうが、父にいたる系譜は知られていない。冒頭の引用に見るように、その父の名も文献のあいだに一定しないが、これは岡田八千代の家に残る「小山内建之章」「藤原建印」というような印鑑の刻字によって異同を正すことができる。（さきごろ出た親戚の医者^の伝記にも、人偏のない字になっている。）親戚の老女の説に、建をタテシと訓むのだというが、どうであろうか。ただこの字に、タケルという訓がないこともない。藤原という氏の名は、平泉に連想がゆきやすいが、古い鎮守府將軍の系統をひくものらしく、僭称ならば別として、これは前に述べた小山内一族の歴史と矛盾しない。ただ「抽斎」のなかには、冒頭の引用のほかにももう一箇所、小山内玄洋が新たに召し抱えられたという事実を繰返したところがあって、それ以前には士籍がなかったようにも読めるが、やはり小山内の家は、言い伝えによれば、医師に縁のある津輕家臣であつたようである。その系譜の不明なことは、かねて鷗外も氣にとめていたらしく、「抽斎」を書く時に、彼は薫にむかつて、君のお父さんの素性をとうとう突きとめたよと笑いながら話し、薫も笑つて礼を言つたのを傍で見ていた人があるが、藩関係の文書なぞでは、建のような経路をたどつた者の場合、途中の事実を伏せて新規の取立てのように書くこともあるとかで、薫もそれ以上は鷗外から聞き出せなかつたようである。それにしても、同じ城下に数の多い由緒ある同姓のなかで、建の一家の占める地位が決して高くなかつたことは、姻戚関係をたどつても考えられる。建には、ひとりの義母があつて、名を伊佐といい、中村氏の出であるが、その里方は質素な藩士の家柄にすぎないからである。早く父を失つた薫たちの兄妹は、冒頭の引用にもあるとおり、よく母や親戚の口から、父は継母に虐げられて少年のころ江戸に奔り苦学して身を立てたということを聞かされたそうだが、事実とすれば何が争いのもとであつたろうか。八千代が若いころ、父のない淋しさを詩に書いて「女鑑」

だか「女学雜誌」だかに投書したのにたいして、小山内ともとかという札幌の女教員から手紙で従姉と名のりかけられ、しばらく文通が続いたというが、あるいはその人の父親が、名もわからないままに建の兄に当るのかとも思われるし、また今は多磨墓地に改葬されて薫のそばに眠る小山内秀三という人が、墓面の歿年月や行年からの推定で、建とは十あまり年の違う異腹の弟とも言われているらしく、兄弟の關係も複雑で、あるいは家督争いが一家のなかにあったのかとも想像される。あるいは、蘭法医学を学ぶ道は、もうそのころ津輕の城下に開けていたわけだから、少年の建が人に勧められて早くこれにこころざし、義母が妨げたのであったかもしれない。建が素性もわからない他家からの養子だという説は、薫が若いころよく友人に話しもし、短篇にも書いてはいるが、事実と合わない節が多く、八千代に直接聞いただしてみても、兄はひところそういう小説がかった話が好きでしたからと、これは笑って取りあわない。ともあれ、発奮して江戸へ出た建は、杉田成卿について医学を修め、野辺地戦争の際には、数え年二十で、藩の登用を受けるほどのひとかどの蘭法医となっていたわけだから、その俊敏な稟質と、その刻苦勉勵ぶりとを想うことができる。

箱館戦争の後には、建はほどなく再上京したものだと思われる。五稜郭開城が明治二年の夏で、建の著わした「眼科約説」の刊行されたのが、明治五年のことだからである。外科と眼科とを窮めて軍医となり、次の章に述べる小栗鎧と結婚して最初に移った任地が名古屋であった。建は、家をなした後、幾度も伊佐を郷里から呼び迎えようとしたそうだが、むかしを恥じる義母はかたくなにその申し出を拒んだという。

こうして建は、先輩の石黒忠恵に引き立てられ、後進の森林太郎に重んぜられながら、東京、名古屋そのほかの勤務を経て、明治十八年二月二十六日、一等軍医正、広島衛戍病院長として任地に死ん